



しょうぐん

# もみあげ将軍 大ピンチ!

## 室町時代のきんぎん

むろまちじだい

今日は、今から 600 年前の日本「室町時代」に注目しましょう。

室町時代は現在と同様に、日照りや大雨、洪水、冷夏

などがよく起こる、気候が安定しない時代でした。

当時は現在のような天気予報システムがない時代だったので、異常気象を予測することはできず、また、日照りにそなえてダムに水を貯めたり、洪水にそなえて川をがんじょうな堤防で囲んだり、といった対応ができませんでした。

農作物への気候の影響が今より大きかったため、異常気象の年には農作物が全くとれなくなることが多々ありました。そのような年には、日本中で食料が不足する「ききん（飢饉）」

が発生し、たくさんの人たちがごはんを食べられず、苦しむことになったのです。室町時代の人たちは、そのような「ききん」に、どのように立ちむかったのでしょうか。





あしかがしょうぐんとうち

足利将軍が統治していた（1336年 - 1573年）

むろまちじだい

じだい

# 室町時代ってどんな時代？

神

人びとが悪い行ないを  
しないか監視している

将軍

政治をするひと

「徳」がないと災害が  
起こると、当時の人びとに  
信じられている

商売してお金持ち！

商人

お金があるのは  
「徳」があるから  
とされている

開

京都

近畿地方の政治や経済の中心地。  
年貢や物資が集まる

現在の上記区、中京区、下京区周辺

村人

お米を作って  
年貢をおさめる

京都周辺の農村

室町時代、日本の多くは農村でした。そこでは「村人」たちが田畑を耕して、年貢を納めていました。近畿地方の政治や経済の中心は、京都（現代の上京区・中京区・下京区の周辺）にありました。京都には「将軍」やその家来が住み、「村人」たちが送ってくる年貢を受け取り、全国を支配していました。京都にはさまざまな物資が集まっていたので、それを元に商売をする「商人」たちもたくさん住んでいました。

室町時代の人たちは、神々が自分たちの行いを監視していると考えていました。身分が高かったり、豊かな暮らしをしている人が「徳がない（悪い行いをする）」と、バチがあたると信じられていました。特に、「徳がない」将軍だと、日照りや長雨、洪水、冷夏などの災いがあるとされていました。お金のある商人などは、寺社にたくさん寄付をして、「徳がない」人だとは思われぬようにしていました。そんな「徳がある」（ように見える）将軍たちに、村人は年貢を納めていました。

## 室町キャラクター紹介

## 将軍

もみあげがチャームポイントの足利<sup>あしかが</sup>将軍<sup>しょうぐん</sup>。家来<sup>けらい</sup>たちと京都<sup>きょうと</sup>に住んで、政<sup>せい</sup>治<sup>じ</sup>をしていました。「村人<sup>むらびと</sup>」たちが農<sup>のう</sup>村<sup>そん</sup>から納<sup>おさ</sup>めてくれる年貢<sup>ねんぐ</sup>（税金<sup>ぜいきん</sup>）のお米<sup>こめ</sup>を食<sup>た</sup>べて生活<sup>せいかつ</sup>していました。

知名度

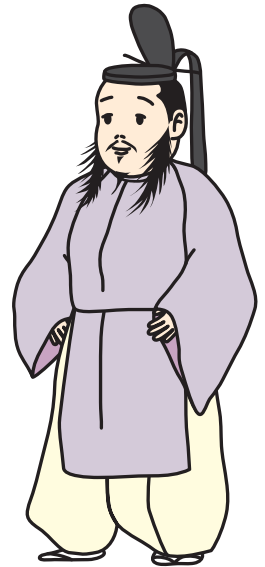


徳度



スキル

政治



## 商人

将軍<sup>しょうぐん</sup>たちに物<sup>もの</sup>を売<sup>う</sup>ったり、お金<sup>かね</sup>を預<sup>あず</sup>かったりする商売<sup>しょうばい</sup>をして暮<sup>く</sup>らしていました。なので、将軍<sup>しょうぐん</sup>たちが住<sup>す</sup>んでいる京都<sup>きょうと</sup>に集<sup>あつま</sup>まり、お金<sup>かね</sup>を稼<sup>かせ</sup>いで裕<sup>ゆう</sup>福<sup>ふく</sup>に<sup>く</sup>らしていました。

知名度

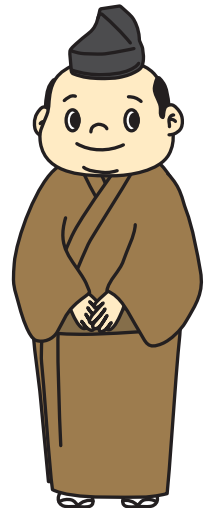


徳度



スキル

商売



## 村人

農村<sup>のうそん</sup>に住<sup>す</sup>んで、田畑<sup>たはた</sup>を耕<sup>たがや</sup>し、お米<sup>こめ</sup>をつくっていました。京都<sup>きょうと</sup>に住<sup>す</sup>んでいる将軍<sup>しょうぐん</sup>に年貢<sup>ねんぐ</sup>（税金<sup>ぜいきん</sup>）として、お米<sup>こめ</sup>やお金<sup>かね</sup>を送<sup>おく</sup>り、その残<sup>のこ</sup>りのお米<sup>こめ</sup>を食<sup>た</sup>べて生活<sup>せいかつ</sup>していました。

知名度



徳度

スキル

農業



きんきのきぎんがきた！コマンド？

クイズ

将軍、商人、村人はどう対応したでしょうか？

AかBの答えをえらんで解答用紙に書こう！

将軍  
しょうぐん

A お米が足りなくなるから、お米から作る「お酒」を飲むのをやめさせよう…

B もっと働くように命令しよう！

お米がないと困る…

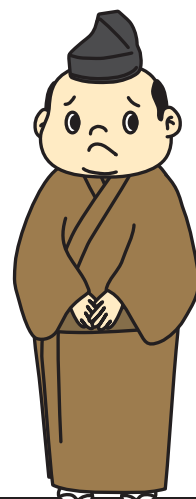


商人  
しょうにん

A お米を全部、倉にかくしておこうか…

B 倉にあるお米を分けてあげようか…

お米をためてるけど…

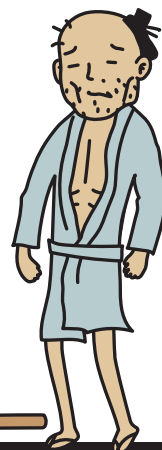


村人  
むらびと

A お米がとれないけど、このまま気長に待とう…

B お米がとれないから、お米をおさめている京都に行ってみよう…

食べる物がない…



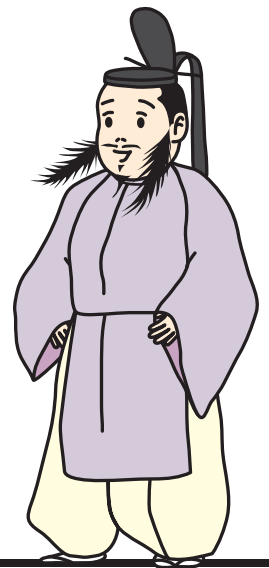
こたえが書けたら次へススム→

自分の答えを書いてから見てね！

将軍  
しょうぐん

A

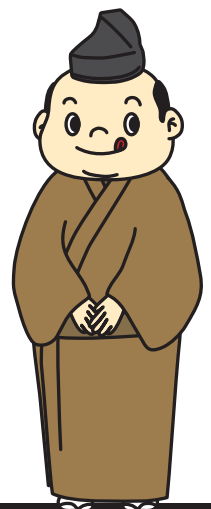
日本酒<sup>にほんしゅ</sup>をつくらなければ、原料<sup>げんりょう</sup>である「お米<sup>こめ</sup>」が節約<sup>せつやく</sup>できて、より多く<sup>おお</sup>の人がお米<sup>こめ</sup>を食べ<sup>た</sup>られる！と将軍<sup>しょうぐん</sup>は考えた<sup>かんが</sup>のでした。



商人  
しょうにん

B

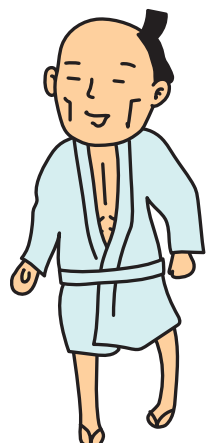
鴨川<sup>かもがわ</sup>の河原<sup>かわら</sup>では、おなかをすかせた人々<sup>ひとびと</sup>のために炊き出し<sup>だ</sup>が行なわれました。川<sup>かわ</sup>に橋<sup>はし</sup>をかける工事<sup>こうじ</sup>をして働き口<sup>ぐち</sup>をつくり、お給料<sup>きゅうりょう</sup>の代わり<sup>か</sup>にお米<sup>こめ</sup>をくばる商人<sup>しょうにん</sup>もいました。



村人  
むらびと

B

村<sup>むら</sup>のお米<sup>こめ</sup>はなくなったけど、将軍<sup>しょうぐん</sup>がいる京都<sup>きょうと</sup>にいつもお米<sup>こめ</sup>を送<sup>おく</sup>っているし、仕事<sup>しごと</sup>もあるかもしれない。・・・  
そうだ！京都<sup>きょうと</sup>に行<sup>い</sup>こう！と村人<sup>むらびと</sup>は考えた<sup>かんが</sup>のでした。





# 1420年 応永の大ききん

史実に基づく対応とその裏に  
隠された思惑を見てみよう！

1419

秋

不作のため、きぎんが発生しそうな気配



お米も節約できるし、悪徳の一つでもあるから、  
飲酒を禁止しよう♪

1419年10月

将軍足利義持が禁酒令を出す

1420

春

本格的なきぎんに突入！摂津国西宮（兵庫県西宮市）に飢えた人があふれている！

1420年2月

将軍足利義持が「2回目」の  
禁酒令を出す

1420年5月

将軍足利義持が「3回目」の  
禁酒令を出す



足利義持肖像  
(神護寺蔵)



夏

6月から8月まで雨が降らず...雨乞いが盛んに行われるが...きぎんはさらに酷くなりそうだ...

1420年6月

祇園祭を中止にする

1420年7月

将軍足利義持が八朔（お中元）  
の贈答を禁止する

贅沢を禁止して、「徳」を示そう！



「徳」があるなら、こういう時には  
年貢を減らしてくれるはず！

将軍足利義持の命で、商人らが相国寺で炊き出しを行う



私の「徳」を示すために  
商人と協力してがんばろう！

人々に食事を振る舞って  
「徳」を見せるぞ！



1420年8月

播磨国矢野荘（兵庫県相生市）  
が年貢免除の申請→減免される

1420年10月

播磨国矢野荘がさらに年貢免除  
の申請→半分まで減免される

1421

春

きぎんはとどまるところを知らない。ついに人々は村を捨て、山野や都市へと食料を求めさまよう

1421年2月

幕府や民間による炊き出しが  
鴨川の河原で盛んに行われる



「徳」を見せて、人々を  
飢饉から救わなければ！

1421年2月

醍醐寺が門前郷（寺周辺の仕事に従事する人々の村）の  
村人にかけていた税金を、商人が肩代わりする

1422年10月

伏見荘（京都市伏見区）で  
村人にかけていた税金を商人が肩代わりする



きぎんのような災害時には  
進んで「徳」を表さなければ

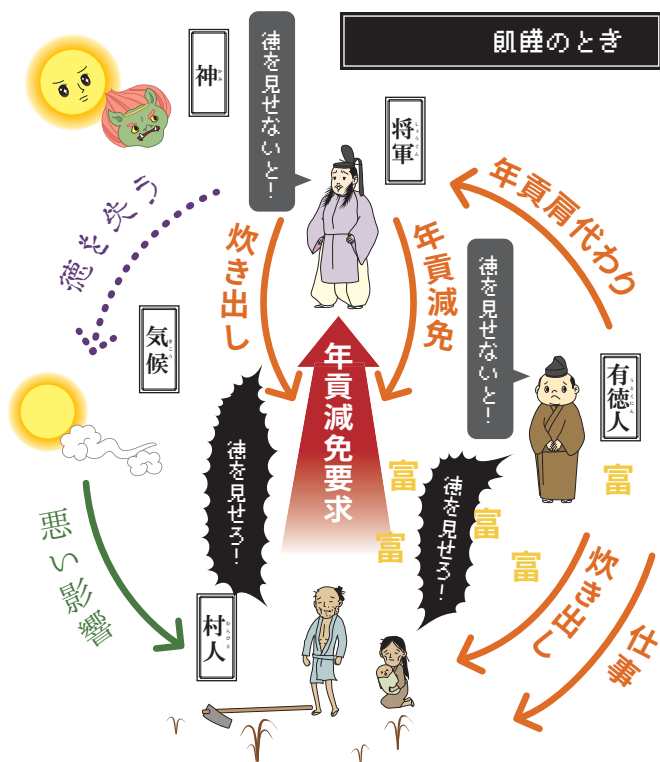
# くわしいお話

室町時代の飢饉への対応は「徳」というキーワードで読み解くことができます。「徳」とは正しい行い、といった意味ですが、中世の人々は「為政者が『徳』を失う（悪い行いをする）と、神仏が怒って災害を起こす」と考えていました。これは天の動きと為政者の行動が関連しているという考え方（「天人相関思想」）に基づいています。

「徳」は為政者だけではなく、身分が高い人や、財産を有しているお金もちの商人などにもあてはまり、彼らは「有徳（徳のある）人」と呼ばれていました。「得」と「徳」は同じ「トク」と発音するので、「得」をたくさんもっているお金もちは、それにふさわしい「徳」を示すことを期待されていたのです。「商人」たちは寺社に寄付などをして、その期待に答えていました（「有徳思想」）。

そんななかで早魃などの天災による飢饉が発生したわけです。将軍たちはそのままでは「徳がない」為政者とみなされてしまうので、「徳のある政治をしている」ということをアピールしなければなりません。「商人」たちもまた、村人たちから、「徳がある」ことを普段以上に示すことを要求されました。そこで、具体的に将軍たちは、年貢の減免や禁酒令を行ない、商人たちは建物をつくる仕事を村人に与えたり、村人の年貢を肩代わりしたりして、それぞれ自分たちの「徳」をアピールしたのです。

やがて飢饉がエスカレートし、最終的には京都に飢餓難民が流入してくる事態に陥りました。将軍と商人たちは協力して、財産をはたいて飢餓難民たちに無料の炊き出しをさかんにふるまいました。これもまた将軍や商人たちが「徳」をあらわすためだったといえます。



飢饉をはじめとする、環境の変動に伴う危機はいろいろな時代に発生しましたが、日本社会はそのときどきの社会情勢に応じて、可能な対応を行ってきました。室町時代の人たちは飢饉に対応するにあたって、将軍や商人に集中していた「富の再分配」を行なうことを選択しましたが、それは当時、「徳」という概念を通じて「再分配」に対する合意を形成することが可能な社会だったから、ともいえます。

以上、今回は室町時代の飢饉への対応と当時の社会との関係についてご説明いたしました。私たちのプロジェクトの研究対象は室町時代ではありません。過去に起きた気候・環境の変動がもたらしたさまざまな危機に、それぞれの時代の社会がどのように対応・適応していたのか、を明らかにすることを通じて、時代を超えて環境変化へ応答する、人間社会の普遍的な在り方を研究しています。その分析を通じて、現代社会がどのように地球環境の変動に適応していくべきか、そして「環境変動に強い社会」とはどのようなものなのか、を探求しています。